

学 位 論 文 要 旨

氏 名 小林 裕子

題 目 中学校家庭科「災害時の食」教育の授業に関する開発研究

本研究の目的は、中学校家庭科「災害時の食」教育の授業を開発し、その有効性を明らかにするとともに、課題解決や改良を重ね、今後の家庭科における「災害時の食」教育を推進するための授業方法として提案することである。本論文は、第1章（序章）、第8章（終章）を含め全8章からなる。形式はⅡ部構成をとっており、第2章から第4章を第Ⅰ部、第5章から第7章を第Ⅱ部とした。

第1章（序章）では、今後の災害予測とこれまでの日本における自然災害時の課題から、「災害時の食」教育の必要性和課題について検討し、本研究の目的やアプローチについて整理した。

第Ⅰ部（第2章から第4章）では、中学生及びその家庭の実態を踏まえた「災害時の食」教育の授業開発について扱った。

第2章では、授業開発の前段階として、中学生とその保護者を対象に「災害時の食」に関する質問紙調査を実施した。結果として、①中学生は「災害時の食」に関する正しい知識が不足している、②中学生は適切な食の備えや対策に関する知識が少ないことから、「災害時の食」に不安を感じている、③中学生の家庭の食品や水の備蓄は十分とはいえない、④中学生・保護者共に「災害時の食」の備えを改善する必要性を感じている、の4点の課題を明らかにした。「災害時の食」教育の授業を開発する上で、これらを解決するための視点を設定する必要性を確認した。

第3章では、中学生及びその家庭の4点の課題の解決を目指して、中学校家庭科における「災害時の食」教育の授業を開発した。授業の開発にあたって、①「災害時の食」の基本的な知識の習得ができる、②「災害時の食」の課題を知り、どのような備えや対策が必要か考えることができる、③学習内容を家庭で共有し、「災害時の食」の備えを見直そうとする、の3つの視点を設定した。1時間目は災害時の食の課題と解決方法を知る、2時間目は災害時を想定した調理実習をする、3時間目は災害時を想定した献立を作成する、の3時間の授業構成とした。開発した授業を実践し、授業前後にアンケート調査を実施した。分析の結果、中学生は基本的な知識を習得し、「災害時の食」の備えや対策を考えるとともに意識の向上が見られた。以上のことから、開発した授業は3つの視点の内、①②については有効であることが示唆された。しかし、授業後アンケートから、3時間目の災害時を想定した献立を作成する学習内容を難しいと捉え、献立の作成数や内容も十分ではないことが明らかとなり、視点③にも関わることから課題となった。

第4章では、中学生の献立作成を支援する方策として、料理レシピサイトの活用を試みた。中学生が料理レシピサイトを活用した授業実践を行い、料理レシピサイトを活用しなかった授業と比較した。結果として、献立作成に料理レシピサイトを活用することにより、栄養バランスを考慮した料理や、複数の食材を組み合わせる加熱調理する料理の作成数が増加し、効果があることが示唆された。また授業後のアンケートからは9割を上回る中学生が、協力してサイトを活用した献立作成ができること、サイトの活用は献立作成に役立つと考えていることが明らかとなった。第3章で開発した授業の課題は、料理レシピサイトを活用することにより解決できた。

第Ⅱ部（第5章から第7章）では、家庭科教科書の記述内容および家庭科教員の現状や意識を踏まえた授業の改良について扱った。

第5章では、現行の小中高等学校の家庭科教科書における「災害時の食」教育の記述分析を行った。結果、対象とした15冊すべての教科書に最低1箇所は「災害時の食」に関する記述があることが分かったが、校種や教科書会社により扱う記述数や内容に大きな差があることが確認された。抽出した「災害時の食」の記述内容を網羅しつつ整理・検討し、20項目の「学習内容」と16項目の「学習活動」、合計36の学習項目に分類した。しかし、小中高で重複する項目があるなど小中高の体系性は明らかにできなかった。

第6章では、家庭科教科書から分類した「災害時の食」教育の36の学習項目を使用し、全国の中学校家庭科教員対象に「災害時の食」教育の質問紙調査を実施した。その結果、中学校教員が「家庭科で学習が必要」と考える学習項目が明らかになった。同時に、必要性は認識されながらも、学習の実施には至っていない項目が大半であることが確認された。また「災害時の食」教育実践上の課題として、①「指導するための授業時間不足」、②「カリキュラム・年間計画にない」、③「指導に適切な教材・教具の不足」、の3点が明らかになった。

第7章では、中学校家庭科教員が「家庭科で学習が必要」と考えた学習項目と、新学習指導要領を踏まえて、第3章で開発した「災害時の食」教育の授業を改良した。また、教員の実践上の課題である①「指導するための授業時間不足」の解決策として、授業のモジュール学習化を行った。②「カリキュラム・年間計画にない」の解決策として、既存の学習内容との適切な組み合わせ指導が可能なモジュール学習の配置を年間カリキュラムに示した。③「指導に適切な教材・教具の不足」の解決策として、各モジュール学習の授業実践のモデルとなる学習指導案を作成するとともに、ワークシート、プレゼンテーション教材及び動画教材を作成し、パッケージで提案できるようにした。

第8章（終章）では、本研究で得られた知見を整理し、以下を本研究の結論とした。

これまでに、中学校家庭科で「災害時の食」教育のための授業は開発されておらず、本研究の成果により、有効性を確認した上で3時間構成の授業を提案することができた。また、授業実践で明らかとなった中学生の献立作成上の課題は、料理レシピサイトを活用することにより解決できた。さらに全国調査で教員が必要と考えた学習項目を踏まえて授業を改良し、さらにモジュール学習化することで、教員の「災害時の食」教育の実践上の課題の解決を図った。授業をモジュール学習化し年間カリキュラムに位置付けたことにより、既存の食生活領域の学習と組み合わせ短時間での指導が可能となった。また学習指導案および授業に活用できる教材をパッケージ化したことにより、教員の授業準備の負担軽減を図るとともに、授業実践に必要な情報を提供することが可能となった。

「災害時の食」教育は非常時にのみ役立つ特別な食教育ではない。日常生活に「災害時の食」の視点を取り入れ、日頃から継続的に備えや工夫をすることが重要である。本研究の成果として、中学校家庭科の食生活領域に「災害時の食」教育の視点を取り入れた有効かつ実現可能性を高める授業方法を示すことができた。このことは、今後の家庭科における「災害時の食」教育の実践を推進・定着させるための一助となりえると考ええる。